

看護研究 第49巻 総目次

2016年(第1号～第7号)

〔表示は、題名・著者名・(号)掲載ページ〕

〔特集〕

第1号◆混合研究法が創る未来 第1回日本混合研究法学会学術大会より (企画：『看護研究』編集室)

〈ワークショップ1〉混合研究法入門。【講師】R. パーク・ジョンソン、マイク・D. フェターズ／編集・報告：抱井尚子。(1) 6-14.

〈基調講演3〉看護における混合研究法の活用—世代間交流看護支援の研究を例に。亀井智子。(1) 16-24.

〈ワークショップ3〉混合研究法としてのグラウンデッドなテキストマイニング・アプローチ。稲葉光行、抱井尚子。(1) 25-36.

〈パネルディスカッション1〉混合研究法をめぐる議論からみえてくるもの。【パネリスト】ベンジャミン・F. クラプトリー、抱井尚子、亀井智子、マイク・D. フェターズ／編集・報告：八田太一。(1) 37-44.

第2号◆看護学の発展にとっての理論構築 Transitions Theoryからの展望 (企画：坂下玲子)

【座談会】看護学の発展にとっての理論構築。南裕子、片田範子、坂下玲子。(2) 84-95.

看護理論とその展開—Transitions Theoryからの考察。坂下玲子。(2) 96-103.

概説 Transitions Theory／トランジション理論。増野園恵。(2) 104-113.

〈Dr. Afaf I. Meleis 講演「Disruptions : Then What?」より〉Disruptions から始まる Transition—関連概念と理論枠組の理解。訳・編集：岡田彩子。(2) 114-121.

For Future Development of Situation Specific Theories. Eun-Ok Im. (2) 122-134.

【翻訳】状況特定理論の将来の発展のために。Eun-Ok Im／翻訳：鈴木和代。(2) 135-143.

〈Dr. Eun-Ok Im の論考を受けて〉
状況特定理論はどう構築されるのか—理論構築を具体的にイメージするために。小野博史、坂下玲子。(2) 144-

147.

第3号◆看護におけるシステムティックレビュー (企画：『看護研究』編集室)

コクランにおけるシステムティックレビューの基礎—リスク・オブ・バイアスとメタアナリシス。大田えりか。(3) 172-188.

質的研究のシステムティックレビューの現状と動向—JBIの取り組みから。今野理恵。(3) 189-200.

第4号(増刊号) 看護と哲学 共同がもたらす新たな知 (企画：西村ユミ)

看護と哲学—看護と現象学の相互関係についての一考察。榊原哲也。(4) 258-266.

補い合うことと考えること—ある看護師へのインタビューの分析から。小林道太郎。(4) 267-275.

言葉を使って痛みを他人に伝えることはできるか—痛みの表現における発話行為と比喩の使用についての考察。池田喬。(4) 276-284.

哲学を学びながら臨床現場で働く。三浦智美。(4) 285-292.

生きられたからだを描く—回復しつつある身体の実験から。坂井志織。(4) 293-299.

慢性病者の経験の記述に関する一試論—“第二の人生”が主題となった語りを手がかりに。細野知子。(4) 300-307.

まわりの人との関係の中で「できる」ということ—現象学が見せてくれるもの。村上優子。(4) 308-315.

インタビュー分析の言語学的基盤。個別者の学としての現象学。村上靖彦。(4) 316-323.

「そうではなくて」という思考のスタイル—現象学と看護研究の関係を捉え直す。西村ユミ。(4) 324-335.

第5号◆介入研究をどう進めるか (企画：『看護研究』編集室)

介入研究のこれまでとこれからの展望。西垣昌和。(5)

360-366.

介入研究における研究計画立案のポイント. 奥村泰之. (5) 367-374.

介入研究の実施体制のマネジメント—計画立案時のロジスティクス構築の重要性. 竹原健二. (5) 375-384.

介入研究の道り: 発案から臨床応用まで—背面開放座位とアロマセラピー研究の実績から. 大久保暢子. (5) 385-394.

看護のエビデンスを大規模研究から構築するために—AMEDの取り組みから. 関根小乃枝. (5) 395-405.

第6号◆よい論文とは? おもしろい論文とは?

(企画:『看護研究』編集室)

【座談会】よい論文とは? おもしろい論文とは? 山本則子, 小松浩子, 秋元典子, グレック美鈴. (6) 447-457.
よい研究の基盤—実践における価値と背景にある知識を結びつける. 大西麻未. (6) 458-461.

よい論文は未来をデザインする. 落合亮太. (6) 462-465.
よい論文とは引用される論文である. 掛田崇寛. (6) 466-468.

定点から研究を続けることで見えてくる全体像—精神科訪問看護の研究から. 萱間真美. (6) 469-472.

関心をもつ現象に対して考える契機を与える論文. グレック美鈴. (6) 473-475.

課題を解く研究. 坂下玲子. (6) 476-479.

素朴な疑問への答えを探し続けること. 心光世津子. (6) 480-482.

「他者との対話」がよい論文, おもしろい論文を創る. 辻村真由子. (6) 483-486.

思わず, うなずかされる. 西村ユミ. (6) 487-489.

エビデンスをつくり, 人々の役に立つ研究をめざす. 福井小紀子. (6) 490-493.

何のための研究か, 誰のための研究か. 松岡千代. (6) 494-497.

研究成果の普及に力を入れる. 宮下光令. (6) 498-502.
臨床看護で活用できる研究へのこだわり. 山勢博彰. (6) 503-506.

「研究上の問い」に対する答えを見つけるためのチャレンジ. 山本則子. (6) 507-510.

論文のおもしろさ, よさはどこにあるのか?—社会を取り巻く現状と看護研究の課題. 吉野八重. (6) 511-515.

第7号◆研究の意味

多領域との対話から

(企画:『看護研究』編集室)

研究の意味—社会的価値, 学術的意義, 個人的意味. 八田太一. (7) 541-546.

ケアの実践のための研究はなぜ容易でないのか?. 島蘭進. (7) 547-551.

健康と医療の人類学. 道信良子. (7) 552-556.

生活モデルへの転換と看護職. 三井さよ. (7) 557-563.

臨床で働くお腹をくくった看護師にとっての, 研究のもつ意味. 宮子あずさ. (7) 564-569.

哲学の意味と看護. 河野哲也. (7) 570-575.

看護研究が医師にとって意味あるものとなる場面. 藤沼康樹. (7) 576-581.

【原著】

雑談に埋め込まれた社会的学習—小児病棟における「わざ」の伝達. 川名るり. (3) 226-240.

家族介護者の介護生活影響尺度の開発. 岩田昇, 堀口和子, 鈴木千枝. (7) 604-614.

【特別記事】

〈看護におけるEBP構築に向けて考える〉

①エビデンスを臨床に浸透させるための試み—The Japan Centre for Evidence Based Practiceの経験をもとに. 植木慎悟, 山川みやえ, 伊藤美樹子, 渡邊浩子, 牧本清子. (1) 48-55.

②システマティックレビューから何を学ぶのか—厳密なシステマティックレビューに取り組む際の視点. 松中枝理子, 牧本清子. (1) 56-64.

【研究対象者に対する研究倫理を考える①】研究対象者に対する倫理的配慮の問題点. 河原智江, 久保恭子, 西村ユミ. (3) 206-209.

看護研究における実践に関する知識の基本的な枠組み. 家高洋. (3) 212-224.

第19回EAFONS in Chiba開催報告. 宮崎美砂子. (4) 340-343.

【研究対象者に対する研究倫理を考える②】研究対象者に対する倫理的配慮の範囲と取り組むべき課題. 河原智江, 西村ユミ, 久保恭子. (5) 410-414.

【研究対象者に対する研究倫理を考える③】研究対象者にとって倫理的であるということの判断基準. 家島明彦. (6) 522-526.

【看護理工学は創造する—エコーを用いた最新の研究成果】

①不顕性誤嚥を予防する研究を通して学んだ看護研究の重要性. 三浦由佳. (7) 584-588.

②「点滴漏れを減らすための血管を可視化する研究」からみた看護学とのづくり. 野寄修平. (7) 589-594.

③明日の看護学を創る学生の指導を通して—我慢させない療養生活の実現をテーマに. 真田弘美. (7) 595-596.

【研究対象者に対する研究倫理を考える④】研究対象者の立場に立った研究倫理教育の検討. 河原智江, 西村ユミ,

久保恭子. (7) 598-603.

〔Scope〕

第12回国際家族看護学会議—家族看護学の潮流を探る.
法橋尚宏, 西垣佳織, 小林京子, 荒木暁子, 和田佳子,
藤井智恵美, 山口智治, 佐藤奈保, 本田順子, 大島万里
子, 鈴木智子. (2) 150-154.

〔研究報告〕

介護老人保健施設に勤務する看護師のアセスメント技術に
関する研究. 山田由紀. (5) 416-424.

〔連載〕

Journal Watch—海外の看護学研究から学ぶ
Extra: 【座談会】海外の文献から大学院生は何を学ぶのか
— Journal Watch の活動を通して. 深堀浩樹, 小玉淑
巨, 井尻弓子, 奥村朱美, 那須佳津美, 山縣千尋. (3)
242-251.

英語論文を書くということ

③文献検索の目的, 種類, 実行法. 余 善愛. (1) 70-76.

④原著論文を書く過程. 余 善愛. (2) 158-163.

⑤考察を書く. 余 善愛. (4) 344-352.

⑥論文を出版するまでの過程. 余 善愛. (5) 428-436.

⑦論文を査読するために必要なこと. 余 善愛. (6) 530-
534.

⑧日米の看護のはざまで—英語論文を書くことの意味. 余
善愛. (7) 618-623.

〔書評〕

『経験型実習教育 看護師をはぐくむ理論と実践』多様な事
例の中に自己を見つける—省察的实践者としての教員
の学びを援助する1冊. 前川幸子. (1) 69.

『混合研究法入門 質と量による統合のアート』多様な混合
研究法の全体像を効率よく学べる入門書. 大山裕美子.
(2) 155.

『基本を学ぶ看護シリーズ2 からだの仕組みと働きを知
る』看護実践を想定した画期的な解剖生理の教科書. 松
月みどり. (6) 521.

『科研費 採択される3要素 アイデア・業績・見栄え』わ
が国の医学の進歩にきわめて重要な役割を果たす良書.
高久史磨. (6) 529.